# ＩＳ　いちか君と一夏のＩＳ学園生活

迷い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　いちか君と一夏のＩＳ学園生活

【Ｎコード】
Ｎ７７６９Ｙ

【作者名】
迷い人

【あらすじ】
初めてＩＳを機動させた時、原因は解らないが子供の姿になった一夏。ただＩＳを機動させると本来の姿に戻れる。子供の一夏…大人の一夏…。この一夏の状態の魅力に色々と振り回されるＩＳ女性陣。波乱万丈の一夏のＩＳ学園での生活が始まる。皆さんの作品を読んでいたら自分も書いてみたくなり挑戦してみました。未熟者ですがよろしくお願いします。

**いちわめ～**

『ＩＳ』…正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかしこのスーツは致命的な欠陥があった。『ＩＳ』は女性以外は使う事が出来ない。だが例外が出た。一人の男性が『ＩＳ』を動かしたのだ。その例外な存在、『世界で唯一ＩＳを使える男』になった男性の名前は織斑一夏。彼自身それを望んだ訳ではないだろうが出来てしまった以上『ＩＳ』と関わった生活を余儀なくされるだろう。その点は彼も『ＩＳ』を動かした時点で覚悟は出来ていたかもしれない。だが予想外の事が彼の身に起きた。恐らく誰も予想しなかったことだろう。それは…

「全員揃ってますね！それじゃあＳＨＲをはじめますよ」

黒板の前で微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・」

誰からも反応はない。教室の中は緊張感…ではなく疑問を感じてい

る女生徒ばかりだろう。真耶と〝当の本人〟以外は。

「そ、それじゃあ自己紹介を始めましょうか」

何とか場を和ませようとする真耶。妙な空気のまま自己紹介が始まった。順調に自己紹介が進んで行き遂にクラスの生徒達が疑問に思っている者の順番だ。

「え～と、次は織斑一夏君」

「は～い」

呼ばれた青年…いや、幼く可愛らしい男の子が教壇に向けて歩き始めた。年齢的に見て五歳か六歳くらいでＩＳ学園の制服を着ていて半ズボンだ。

「織斑一夏です。よろしくおねがいします！」

一夏は頭をペコっと下げて礼をした。

「はい。上手に自己紹介が出来ましたね」

真耶は一夏の頭を撫でた。

「へへ…」

やや顔を赤くしながら照れた表情をしている一夏。二人は和やかな空間を作っているがクラスの女生徒達は困惑していた。一同こう思っているはず〝何でここに子供がいる〟と。そんな疑問を余所に二人が和んでいるとパアンッ！と教室に音が響いた。そして真耶が頭を抱えて苦しんでいた。

「山田先生。生徒たちの前で何をなさってるので？」

すらりとした長身、過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目。黒いスーツを着た女性が出席簿を持って真耶の背後にいた。先ほどの音は出席簿で叩いた音だろう。

「あっ、千冬お姉ちゃん！」

笑顔で千冬の元に行く一夏。

「自己紹介は出来たか？」

「うん！」

笑顔で頷く一夏。そんな一夏の頭を撫でる織斑千冬。若干、顔が緩んでいるように見えるのは気のせいか？千冬の人気は凄いもので、女生徒達が騒いでも不思議ではないのだが今は状況に付いて行けず唖然としていた。

「お、織斑先生。何で叩いたんですか？い、痛いです…」

涙を流しながら千冬に訴える真耶。

「生徒たちの前で惚気ているからです」

そう言いながら小さい一夏の頭を撫でながら緩んだ顔している千冬。

「すいません…（今の織斑君を見ていると母性本能が擽られるですよね～）」

そんなやり取りを千冬と真耶がしていると女生徒の一人が遂に質問をした。

「あ、あの～先生方。聞きたい事があるんですが…」

「んっ？何だ言ってみろ」

「その…そちらのお子さんは一体…」

恐る恐る質問しながら一夏を指をさす女生徒。

「この子か？自己紹介したのだろう？この子は織斑一夏。私の弟だ」

「えっ…？あの子って千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『ＩＳ』を使えるっていう？」

「でも、年齢は私達と同じって聞いたけど…」

女生徒達がざわめく。

「君達もニュース等で知っていると思うが、この子は『世界で唯一ＩＳを使える男』だ。ＩＳを使える以上ここ、ＩＳ学園に入学をさせた」

「それはわかるんですが…」

女生徒達が一夏をチラチラと見る。

「君達の疑問はわかる。同年齢と聞いていたのにここにいるのは小さな子供だ。不思議に思うだろう」

女生徒達は一同に頷く。

「男なのにＩＳを使えるためかどうかは原因不明だが、初めてＩＳを起動させた後…そのまま体が子供になった。それに体だけでなく精神面まで子供になってな…」

「そ、そんな事があるの？」

「さ、さあ？」

女生徒達もＩＳを使って体に異常が出るなど考えてもなかったせいか同様している。

「君達がＩＳを使っても体に異常は出ない。この子が特例なだけだ」

「でもその…子供の状態で授業なんて受けられるんですか？」

女生徒の一人が質問する。

「ＩＳを機動させれば本来の姿に戻る。それに子供の姿での記憶も本来の姿に戻れば反映される。頭は悪くはないから学科の方は大丈夫だろ。ダメな時は別に方法を考える」

「はぁ…」と言いながら女生徒たちは頷く。

「君達は何も気にせずに訓練に勤しむように。この子が気になって訓練に集中出来なかったという言い訳は聞かん。いいな」

「まぁ、千冬様がそう言うなら…」

生徒達は簡単に納得していく。いいのだろうか？

「それにあの織斑君を見ていると何か…」

「うん。母性本能を擽られるというか…」

「半ズボン…」

女生徒達は小さくなった一夏を見て、顔を赤くする者、鼻息が荒くなる者、何故か手をワキワキする者など様々だ。などと話をしているとチャイムが鳴った。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはＩＳの知識を覚えてもらう。その後の実習だが、半月で体に染み込ませろ。よかろうがよくなかろうが返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

「は～い！」

子供になった一夏は自分が問題の中心になっているとは露知らず手を上げて元気に返事をする。そんな一夏を見た、教室にいる女性陣は…顔が緩んでいた。

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり今は休み時間。教室は異様なオーラに包まれていた。『世界で唯一ＩＳを使える男』を見ようと、廊下には他のクラスの女子、二、三年生の先輩達が詰めかけている。一夏を見に来た女生徒達はまさか一夏が『可愛らしい男の子』だとは思わなかったらしく驚いていたが、直ぐに可愛いいから気にしないと言う事になり一夏を見ながら…個々に様々な反応をしていた。女生徒達は一夏に話しかけようとしているが互いに抜け駆けをしよ

うと思っているためか、相手の出方を気にしていて膠着状態になっていた。

「…ちょっといいか」

この膠着状態を崩し一夏に話しかける女子がいた。髪型はポニーテール肩下まである黒い髪。身長は女子の平均的なものだろう。一夏は少し首を傾げて声をかけてきた女子を見ていると。

「あっ！箒お姉ちゃん」

一夏は笑顔になり箒と呼ばれた女子の足にくっ付いた。その時、室内なのに箒に落雷が落ちたように見えた。

「あっ、あ～一夏。と、取りあえず放してくれ…（か、可愛い。抱きしめたい…い、いかん！冷静になれ！この子は一夏なんだ。あの…私の…だが！ああ、考えが纏まらない）」

顔を赤らめながら必死に緩む顔を我慢している箒

「箒お姉ちゃん～」

小動物のように箒に懐き、子供特有の無邪気で無垢な笑顔で箒を見上げる一夏。再び箒に落雷が落ちたように見えた。

「か、可愛い！」

限界を超えたらしく箒はよだれを垂らしおもいっきり一夏を抱きしめた。いつもの吊りあがった目尻とは違い目は逝っていた。鼻息も荒いようだ。

「ぐえっ！」

箒に力いっぱい抱きしめられ苦しむ一夏。箒の力が強すぎるためか一夏は苦しんでいた。

「あーっ！ズルい！」

「私も抱きしめたい！」

「次は私が！」

「私は別のことを…」

自分も一夏を抱きしめたいと女生徒達が言いだす。今の一夏の状態を心配してくれる人はいないようだ。

「ええい！一夏は今、私との時間を過ごしているんだ。邪魔をするな」

箒が吠える。しかし他の女生徒達も負けてはいない。ギャーギャーと言い合っている。そうしていると…

「うるさいぞバカ共が！」

いつの間にか教室に来た千冬が一喝する。

「さっさと席に着け。授業をはじめる」

しぶしぶ席に着きはじめる生徒達。ただ生徒達は口々に…

「次は私が織斑君を…」等と言っていた。

ふぅ…と息をつく箒。

（何とか一夏を守る事が出来た。この最高の癒しを！、ではなくて一夏の事に関しては他の誰にも譲りたくはない。一夏は…私の…）

「…はっ！」

（わ、私は、な、何を考えているんだ）

緩んだ顔ではなく、恋する乙女の顔から先刻までの吊りあがった目尻に戻る。

「さ、さぁ一夏。授業が始まる。席に戻るぞ」

一夏に声をかけるが反応が無い。無反応の一夏を見てみると口から魂らしきものを出していた。

「い、一夏！一夏！どうしたんだ一夏！」

自分のバカ力…もとい自分のハグが原因で一夏が意識を失っているとは露知らず一夏に呼びかける箒。

「何をして…って一夏！しっかりしろ！保健室…いや、病院、いや、

ブラックジャックを…いや…」

混乱する千冬。いつもの威厳が全くない。

「きゃー織斑君！」

「しっかりして！」

「今、人工呼吸を！」

「それは私が！」

女生徒達も騒ぎ出す。世界で唯一ＩＳを使える男だからか、それとも…とにかく騒ぎの中心にいるのは一夏のようだ。こんな感じで小さくなった一夏のＩＳ学園での生活が始まった。

## いちわめ～（後書き）

自分の考えた事を文章にするのは難しいですね。更新に時間がかかりそうです。ここに訪れたくれたみなさん。駄文ですがよろしくお願いします。

## だいにわめ～（前書き）

いきなり４１００アクセスもあるなんて驚きました。ＩＳの人気の凄さを実感しました。訪れたみなさんありがとうございます。
子供の時の一夏は平仮名でいちか君と書きたいと思います。大人の時との状態を分かりやすくしたいので。
それと今回は短めです。すいません。

**だいにわめ～**

「ちょっと、よろしくて？」

「？」

物語が始まった早々、いちか君に声をかけてきた相手がいた。話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態でいちか君を見ている。わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。今の世の中、ＩＳのせいで女子はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎで女＝偉いの構図になっている。そうなると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今では町ですれ違っただけの女性にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくない。そういう時代の女子がいちか君の目の前にいた。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、はい。はじめまして、織斑いちかです」

ペコっとお辞儀をして挨拶をするいちか君。

「これはご丁寧に。私はセシリア・オルコットですわ」

セシリアもお辞儀をして挨拶をした。

「って、そうではなくて。相手が子供だと、どうも調子が狂いますわね」

こめかみに手を人差指で押さえながら、ふぅとため息をだすセシリア。

「あの、セシリアお姉ちゃんは僕に何か御用ですか？」

首を傾げながらセシリアを見るいちか君。

「そ、そうでした」

コホンと咳払いをするセシリア。

「挨拶をしようと思いまして。でも世界で唯一男でＩＳを操縦できると聞いてましたから、少しは知的を感じさせるかと思ってましたがこんな子供だったとは。期待はずれですわね」

「すいません…」

やや涙目で謝るいちか君。

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから、あなたのような子でも優しくしてあげますわよ。ひっ！」

クラスの女子達が殺気が籠った目でセシリアを見ていた。とくに箒の眼光は凄まじかった。箒や女子達がセシリアを睨むのは〝可愛いいちか君を苛めている〟と捉えられているからだろう。

「（な、なんでしょう。このアウェー感は？）」

教室の空気にたじろぐセシリア。

「と、とにかくそうい事ですから覚えてくださいまし」

そう言って自分の席に戻るセシリア。

「だ、大丈夫かいちか？」

そう言って箒がいちか君に話かける。

「う、うん」

まだ涙目で頷くいちか君。

「いちか。男の子が人前で涙を見せるものではない」

「う、うん！」

涙を拭いて笑顔でこたえるいちか君。

「よし」

そんないちか君の頭を撫でる箒。

「（セシリア・オルコット。可愛いいちかを泣かせるなんて、斬らねばならないな。それにしても涙目だったいちか。あれはあれでいい…）」

顔が緩み目が逝ってしまった箒。そんな箒を見ていちか君は…

「箒お姉ちゃん怖い…」

怯えていた。

三時間目の授業は千冬が教壇に立っていた。

「さて、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「代表者てなんですか？」

いちか君が千冬に質問する。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はい。織斑君を推薦します！」

女子の一人が手を上げて言った。

「私もそれが良いと思います」

他の女子も同じ意見のようだ。

「他にいないのか？だったら無投票当選だぞ」

「待ってください。納得がいきませんわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、こんな子供にクラス代表者を任せて良いと本気で思ってますの？」

『うっ！』と女子達は唸る。子供にクラス代表者を任せる事がマズイと思っているようだ。

「いいですか。クラス代表者は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

ドンドンとヒートアップするセシリア。

「それにこんな子供がＩＳを使って戦闘をするなんて出来ると思いまして」

「出来るぞ」

「えっ？」

千冬が言葉を挟んだ。

「最初に言わなかったか？この子はＩＳを機動させれば本来の姿に戻る。そのあたりに関しては問題はない」

「だ、だったら決闘をしましょう。勝った方がクラス代表者になると言う事で」

「だそうだが、いちかは良いか？」

可愛らしい顔とは違いやや大人っぽく、どこか逞しさを感じる顔で。

「うん！わかった。僕、戦うよ」

宣言するいちか君。

「織斑君。止めた方がいいよ。セシリアはイギリスの代表候補生だよ」

女子の一人が止めてくる。

「代表候補生って何ですか？」

「国家代表ＩＳ操縦者のことだよ。まぁ、ＩＳのエリートってとこかな。だから実力も相当なもののはずだよ」

「でも千冬お姉ちゃんが、男が一度言った事は変えちゃダメって言ってたから」

と先ほどの顔で止めてきた女子の方を見る。

「はう！」

その女子は顔が真っ赤になり。

「先っきまでの可愛い顔とは違った良さが…」

「？」

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように（先っきの顔を写メで撮りたかった…）」

ぱんっと手を打って千冬が話を締める。そして授業が始まった。ただ女子達は授業に集中出来てなかった。先ほどのいちか君のギャップに一同、萌えていた。そして毎度のことながら箒は顔が緩み涎をたらし。

「あの顔は反則だ…でも…良い…」

そんな箒を見ていちか君は…

「箒お姉ちゃん。やっぱり怖い…」

また怯えていた。

## だいにわめ～（後書き）

次回はセシリアとのバトルまで行きたいですね。そうしないと大人の時の一夏の出番が無いので。
次回もがんばりますのでよろしくお願いします。

## だいさんわめ～（前書き）

セシリアとのバトルまで話を続けるつもりが手前で終わってしまった。これも文才のなさでしょうか？
みなさんが楽しんでくれれば幸いです。では！

**だいさんわめ～**

いきなりだがここＩＳ学園は全寮制なのだ。生徒はすべて寮で生活を送る事が義務づけられている。これは将来有望なＩＳ操縦者達を保護するという目的があるらしい。確かに、未来の国防が関わっているとなると、学生のころからあれこれと勧誘しようとする国がいてもおかしくはない。実際どこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死だ。特にこの物語の主人公こと織斑いちか君は、今まで前例のない『男のＩＳ操縦者』だから、各国の大使だの遺伝子工学研究所の人間など色々な連中が来るだろう。そんな連中からいちか君を守るために寮に入るのも当然といえる。そして今、いちか君は副担任の山田真耶と手を繋いでいちか君の部屋に向かっている。

「それでね…」

「そうですか…」

笑顔で一日の出来事を話すいちか君。それを笑顔で応える真耶。中睦まじい姉弟に見える。真耶が千冬以上に姉に見えるのは気のせいか？ちなみにいちか君の着替えなど日用品は千冬が用意した。恐らく大金を使い特注の物ばかり用意したと思われる。

「えーと、ここですね。１０２５号室は」

真耶は部屋番号を確認してドアを開けた。

「はい。今日からここが織斑君のお部屋になりますよ」

部屋の中は、まず目に入るのは大きめのベット。それが二つ並んでいる。恐らくそこいらのビジネスホテルのよりいい代物だろう。いちか君がベットの上で飛び跳ねていると。

「誰かいるのか？」

奥の方から声が聞こえてきた。ドア越しなんだろう、声に独特の曇りがある。部屋にシャワー室があるのでそこにいるのだろう。

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

部屋にあるシャワー室から出てきたのは今日再会を果たした幼なじみだった。相手が女子だと思ってそのままの恰好で出てきたのか、箒はその体にバスタオル一枚を巻いただけの姿だった。

「・・・・・・・・・・」

きょとんとした顔の箒。

「い、い、いちか・・・？山田先生？」

「あっ、箒お姉ちゃん」

「こんなタイミングで来てすいません、篠ノ之さん」

「あ、いえ、お構いなく、ではなくて…」

状況について行けず混乱する箒。

「何故、いちかと山田先生がここに？」

「えっとですね、織斑君もこの部屋で生活する事になります。つまり篠ノ之さんのルームメイトは織斑君です」

「へ？」

さらに混乱する箒。

「本当は年頃の男女が同じ部屋と言うのは良くないですけど、今の織斑君の状態で一人にするのは色々と不安なので」

「はあ…」

「織斑先生との相部屋も考えられたんですけど、教師と生徒が同じ部屋というのも良くないですから。そんな時、篠ノ之さんが織斑君と幼なじみだと聞いたので、良くはないですが織斑君の事を任せようという事になりまして」

「そんないいかげんな…」

「篠ノ之さんも急にこんな事を言われて困るでしょうけど、そこを何とかお願いしたいんです」

頭を下げる真耶。

「う、んー」

悩む箒。さすがに子供の姿だといえ、好きな異性と相部屋というのは悩むようだ。そんな時…

「箒お姉ちゃん…」

箒の手を握り切なげな顔で箒を見上げるいちか君。本日三回目の落雷が箒に落ちた。

「はい、問題はありません。任せてください！」

一瞬にして決断する箒。

「ありがとうございます。ではお願いしますね」

そう言って部屋から出て行く真耶。

「それから篠ノ之さん。何時までもその格好だと風邪を引きますよ」

そう言って部屋から出て行った。

「／／／／／／／／／／」

今の自分の恰好を見て赤くなる箒。

「い、いちか。ちょっと待っていてくれ。服を着てくる」

急いで服を着る箒だった。服を着た後、お互いベットに座りこの部屋での線引きについて話そうとしたが…

「・・・・・・」

子供の体の為かいちか君はおねむの様だ。うつらうつらとしている。

「仕方がない、もう眠るぞ。いちか」

「…ん～」

意識が朦朧としているのか、返事もはっきりせずそのまま眠てしまった。

「仕方がない奴だ」

いちかに布団をかける箒。

「さて、私も眠るかな…」

ここまでは普通だったが何故か〝いちか君と一緒のベット〟で眠る箒。

「（一夏と同じ部屋というのはその…色々とな…あるが、嬉しくもあるな）」

箒の表情は照れたような、恋する乙女の表情のようだ。

「（それに小さいいちかとの生活というのも…イイ！）」

先ほどの恋する乙女の表情とは違い、顔が緩み目が逝っていた。鼻息も荒い。

「う、う～ん。箒お姉ちゃん怖い…」

夢の中でも、逝った箒に怯えるいちか君だった。

とある別の部屋。そこに織斑千冬が椅子に座り携帯を使って誰かと話をしていた。

「で、一夏が何故幼児化したのかわかったのか？」

「ん～さすがに束さんでも、直ぐには分からないですな。情報が少な過ぎるからね～。いっくんを私に預けてくれれば直ぐにでも…」

電話の相手は箒の姉にしてＩＳの製作者…篠ノ之束のようだ。

「却下だ」

「ちーちゃんはつれないね。束さんも小さいいっくんとスキンシップをしたいよ～」

「いちかが汚れる」

「酷いな～。まあ、ちーちゃんはいっくんＬＯＶＥだから仕方がないかな。わー待って待って、切らないで！」

千冬が電話を切ろうとしたのをわかったらしく止めにはいる。

「とにかく一夏の件、調べておけ」

「了解～。あっ、それとちーちゃんに一言だけ言っておくことがあるんだ」

「何だ…」

「いっくんに色んな衣装を着せて、その…」

千冬は電話を切った。

「アイツは何を言っているんだ」

部屋に置かれている大量の衣装ケースを見ながら。

「そんなのは当たり前だろう」

いちか君にどの衣装を着せるか吟味を始める千冬。この人は本当に伝説のＩＳ操縦者と言われた人なのだろうか？

翌日朝の八時。食堂でいちか君と箒は朝食を食べていた。ちなみにメニューは和食セットだ。

「ねえねえ、あの子が噂の子だって〜」

「何でも千冬様の弟らしいわよ」

「小さい手でがんばって箸使っている姿。可愛いい…」

いちか君を珍しがるのは昨日から変わらないようだ。周りの女子が一定の距離を保ちつつも、『興味津津ですよ。でもがっつきませんよ。そして萌えてます』という状況だった。

「お、織斑君、隣いいかな？」

「はい？」

声がした方を見ると朝食のトレーを持った女子が三名、いちか君の反応を待ちわびる如くたっていた。

「はい。どうぞ」

声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガッツポーズをしている。周囲からは何か妙なざわめきが聞こえた。

「ああ～っ、私も早く声をかけておけば！」

「まだ、まだ二日目。焦る段階じゃないわ」

「そ、それよりいちか君の部屋って何処かわかった？」

「山田先生が案内してたっていう情報しか…」

いちか君の部屋の情報はまだばれてないようだ。

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだ」

「子供なのに」

「お姉さん達はそれだけしか食べないですか？」

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」

「お菓子よく食べるし！」

等と話していると。

「いちか。私は先に行くぞ」

「あ、はい」

食事を済ませた箒は席を立って行ってしまう。何か機嫌が悪そうに見えた。

「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「はい。幼馴染ですから」

「そ、そうなんだ」

「それに同じ部屋です」

爆弾を投下するいちか君。その爆弾の威力はいか程のものか。

「「「「「「「「「「えっ！」」」」」」」」」」

周囲は大いにどよめいた。

「き、聞いた？　先っきの話」

「え、ええ。篠ノ之と同じ部屋って」

「急いで篠ノ之さんの部屋番号を調べて」

「いいな〜私も織斑君と一緒の部屋になりたいな〜」

女子達の反応は様々だが威力は凄まじいようだ。

「うるさいぞ！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻をしたらグランド十周させるぞ！」

千冬の声がよく通る。食堂にいた全員が慌てて朝食の続きに戻った。いちか君が急いで食べていると。

「いちか。ゆっくりでいいから、よく噛んで食べるんだぞ」

「うん。千冬お姉ちゃん」

微笑ましい姉弟のやり取り？そんな二人のやり取りを聞いていた女子達は『何か理不尽』と思っていた。

三時間目の授業の時、少し問題？が起きた。ＩＳの授業をすれば必ず〝篠ノ之　束〟の名前が出てくる。そうなると妹である箒に話題が行く。そして姉の事を聞かれると大声を出して話を終わらせてしまった。そのせいか教室の空気がやや重いものになっていた。

「さて、授業を続けるぞ。と、そういえばいちか」

「はい。千冬お姉ちゃん」

「いちかのＩＳだが準備まで時間がかかる」

「？」

「予備機がない。だから、少し待ってくれ。学園で専用機を用意させる。出来ないと言われてもさせる」

「それって政府からの支援が出てるって事」

「いいなぁ…私も専用機欲しいなぁ」

女子達がそれぞれ羨ましがる。

「話は終わりだ。さあ、授業をはじめるぞ」

女子達の話を終わらせ授業をはじめる千冬だった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、早速いちか君の席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう言った。

「はい。僕も安心しました」

笑顔で応えるいちか君。

「（やっぱり、調子が狂いますわ。それに…）」

セシリアも前回のアウェー感を味わいたくないのだろう矛先を箒に変えた。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

「妹というだけだ」

束の事を聞かれたせいか、鋭い視線ですごむ。

「（また、いちかを泣かせる気か…）」

束の事ではなかったようだ。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を手で払ってきれいに回れ右、そのまま立ち去っていっ

た。この後、いちか君は箒と一緒に昼食をとった。子供なのに箒がクラスで浮かない様に気を使ったようだ。途中、三年生の女子に話かけられいちか君にＩＳについて教えてくれようとしたが、箒が放つ〇ＮＥ　ＰＩＥＣＥの覇王色の覇気に威圧され気を失った。箒には王の資質があるようだ。

「箒お姉ちゃん」

「なんだ。いちか」

「僕、ＩＳを上手に動かせるようになりたいから、僕を鍛えてほしい」

「急だな。しかしだな…（小さいいちかを鍛えて本来の姿に戻った時に鍛えた効果があるのだろうか？そもそもこの可愛いい、いちかに厳しくするなんて出来るだろうか…）」

「箒おねえちゃん。お願い」

いちか君スマイルが炸裂した。

「よし、わかった。今日の放課後、剣道場で」

威力は絶大で悩む箒を一撃で陥落した。

「（よく考えれば、いちかとの二人の時間が増えることになるな。これはこれで良いか。放課後、いちかと二人きり…）」

顔が緩み鼻息も荒くなる箒。

「この時の、箒お姉ちゃん怖い…」

この時の箒に怯えるのは定番化してきているようだ。

いちか君との特訓の後、道場で着替える箒。

「（小さくなっても体が剣道の事を覚えているのか、素振りをさせても技術がしっかりとしていたな）」

いちか君との特訓を思い出す箒。体が子供のなので厳しい鍛練をするわけにはいかないので素振りなど基礎的な事をした。

「（しかし、小さないちかが素振りをしてる姿を見ていると昔を思い出すな）」

思い出に浸る箒だった。

「（小さないちかも良いが、大きくなった一夏とも会いたいな。まだニュースで流れた写真でしか見た事がない。テレビで出た一夏は、その、まあ、格好いいと思う。そして…）」

頭に巻いた手ぬぐいをほどき、髪に触れる。長く伸びたそれは、後ろでくくってもまだ腰近くまで届くほどだ。

「（よく私だとわかったものだ…）」

六年もの時間が過ぎて一夏自身、体に異常が起きているのに直ぐに箒だとわかってくれた。箒はそれが妙に嬉しかった。

「（髪型を変えなかった甲斐があったというものだ）」

些細な偶然にすがるような、あるいは願掛けに期待するような、そんな甘い考えが多小なりともあった。箒も十五才の春を迎えた恋する少女である。

「（明日から放課後は特訓だ。いちかと二人きりになる口実が出来

た）」

更衣室で一人、握り拳を作って気合をいれる箒だった。

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「箒お姉ちゃん…」

「何だ、いちか」

「僕さ…」

「ん？」

「僕さ、剣道の訓練ばかりでＩＳの訓練をしなかったけど、いいのかな」

「し、仕方がないだろう。お前のＩＳがなかったかのだから」

「うん。そうなんだけど…」

いちか君専用のＩＳはとやらは何かごたついていたらしく、結局来ていない。そう、今も来ていない。とその時…

「お、織斑君織斑君織斑君！」

第三アリーナ・Ａピットに駆け足でやってきたのは山田先生だ。その後ろに千冬もいた。

「ついに来ました！織斑君の専用ＩＳ！」

「！」

「いちか。すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られている。ぶっつけ本番でものにしろ」

「え？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ」

「え、え？」

「「「早く」」」

そう言われ、そのままピット搬入口まで連れて行かれるいちか君だった。そして搬入口の奥にあったのは…

そこには『白』がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しい程の純白を纏ったＩＳが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが僕の…」

「はい！織斑君の専用ＩＳ『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ」

せかされて、いちか君は純白のＩＳに触れる。

「あ…」

少しぼ～とするいちか君。

「何をしている。背中を預けるように座る感じでいい」

「千冬お姉ちゃん…」

いちか君は千冬達の方を見て

「背が届かないし、体にあわない…」

「「「・・・・・・・」」」

三人とも絶句した。確かにそうだ。本来の姿は十五才でも今の姿は五・六才位の体なのだから。

「ど、どうしましょう。お、織斑先生！」

慌てる真耶。

「む…」

サイズの事を忘れていたのか珍しく言葉に詰まる千冬。

「…」

箒はただ唖然としていた。三人が慌てている時、いちか君は『白式』にまた触れた。それと同時に光がいちか君を包み込みそして！

ＩＳを装着した一夏がいた。

「い、一夏、一夏なのか…」

恐る恐る質問する箒。

「ああ、久しぶりだな箒」

笑顔で応える一夏。

「／／／／／／／／／／／／／／」

やっと本来の姿になった幼馴染は男らしい顔だちになっていた。生意気だけだった瞳は、わずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていた。そんな一夏の姿に見惚れる箒だった。

「えっと…その、な…小さくなった俺の面倒を色々と見てくれてありがとな…」

「あ、いや、そ、その、幼馴染なんだ。そんな事は気にするな」

「あ、ああ」

何でしょうこの空気は？

「そ、それとな箒」

「な、何だ？一夏」

「小さくなった俺の面倒を見てくれるのはありがたいだけどな、その…一緒のベットに眠たりするのはちょっとな…。千冬姉が言っていたと思うけど、小さくなった時の俺の記憶は今の俺に反映されるわけでその…な」

赤くなりながら言う一夏。

「え・・・・・・・・はっ！○×△□☆¥」

真っ赤になった箒は全身から湯気をだしているように見えた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに真っ赤になり沈黙する二人。だからこの空気は何だろう？そんな雰囲気を壊す音がした。

パァンッ！

「痛た！」

「これからＩＳを使って戦うのに何をしているんだ？お前は」

凄く不機嫌そうな千冬が何故か持っている出席簿で一夏を叩いた。

「ち、千冬姉。俺ＩＳ装備しているのに何でこんなに痛いんだ？」

頭を押さえて千冬に質問する一夏。

「それは私の技があればこそだ」

「・・・・・・・」

何と言う理由。しかし何故か納得できる理由。千冬の技はＩＳのバリアーをも貫けるのか。

「時間が無いんだ。さっさと行って来い」

「わかったよ…」

ゲートに向かう一夏。

「箒」

「な、何だ」

「行ってくる」

「あ…ああ。勝ってこい」

その言葉に首肯で応えて、一夏はピット・ゲートに進む。遂に一夏の戦いがはじまる。

## だいさんわめ～（後書き）

次回は初の戦闘シーンです。原作以外の戦闘の表現をするつもりですが上手く表現できる自信はありません。
とにかくがんばりますのでよろしくお願いします。

## だいよんわめ～（前書き）

更新が遅れました。すいません。
一夏が中途半端なチートになりました。支離滅裂な点もあると思いますがそこはスルーしてください。

## だいよんわめ～

アリーナの観客席に一夏のクラスメイトはこれから始まる試合を見るため集まっていた。

「いちか君にはがんばってもらいたいけど、相手が悪いよね」

「うん。イギリスの代表候補生だもんね…」

「いちか君が怪我をしなければいんだけど…」

「セシリアも子供相手なら手加減をしてくれるでしょう」

などと一夏が勝つとは誰も思っておらずいちか君が怪我などしないかの方が気になるようだ。

「あっ、ゲートが開くよ」

両方のゲートが開き始めた。そして片方のゲートから現れたのはセシリア。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマー四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じる。対するは…

「ね、ねえ。あの、いちか君って…」

「小さくないよね…。ということは千冬様が言っていた…」

「あれが本来のいちか君の、いや織斑一夏君の姿…」

「・・・・・・はぁ・・・・」

クラスの女子達は『白式』を纏った本来の一夏の姿に見惚れていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズが様になっている。そしてセシリアの手には二メートルを超す巨大な銃器が握られていた。ＩＳは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので、原則空中に浮いている。そのため自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。発射から目標到達までの予測時間は０・四秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「貴方のその姿を見て安心しましたわ」

「？」

「私、子供を痛ぶることなんて出来ませんの。そんな事をすればオルコット家の恥ですわ。その姿なら遠慮なくいけますから」

「そうかい…」

「貴方に最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を一夏の方に、ぴっと人差し指を突きだした状態で向けた。左手の銃は、余裕なのかまだ銃口が下がったままだ。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというなら、許してあげないこともなくてよ」

そう言って目を笑みに細める。〝警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認〟。ＩＳが告げる情報を確認する一夏。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら…」

〝警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填〟

「お別れですわね！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、一夏の体を撃ち抜くはずだった。

「えっ！」

閃光はそのまま一夏をすり抜けていった。

「な…あ、あれを避けるなんて少しは出来るようでわね。でも結果は変わりませんわ。さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が一夏に降り注ぐ。しかも、それらすべてが的確に一夏を狙っている。普通なら凌ぐのですら難しい。しかし、その攻撃はすべて一夏をすり抜けていく。

「いったいどういう事なんですの？わたくしの射撃が当たらないなんて」

ピットでリアルタイムモニターを見ている箒、千冬、真耶。

「織斑先生。一夏を狙った射撃がすり抜けていくのは、ＩＳの機能ですか？」

千冬に質問する箒。

「いや、あれは単に避けているだけだろう。射撃が当たる瞬間に高速でそれも紙一重で回避しているな。ただあまりの速さに回避しているように見えず、すり抜けているように見えるのだろう。あれならシールドエネルギーを殆ど使わなくていいだろうな。オルコットからしてみれば亡霊か何かと戦っている気分だろうな」

「織斑先生は一夏にそんな技を教えたのですか？」

「いや、何も。ＩＳでの戦闘もこれが初めてのはずなんだが。正直、

私も驚いている」

「なるほど。反逆ル○ーシュＬＯＳＴ　ＣＯＬＲＯＳのラ○と同じ技を使っているんですね。わかります！」

拳をグッ！と握りモニターを見る真耶。

「「（何がわかったのだろう？）」」

千冬と箒は思った。

戦闘中の一夏とセシリア。セシリアは四つのビットも使い一夏に向けて射撃をするがまだ、一撃も当たってない。

「（あれだけ撃てばエネルギーを幾分か消費したはず…）」

そう思いながら『白式』のエネルギー残量を確認する一夏。

「（よし、こっちのエネルギーは大丈夫だ。そろそろ攻めるか。でも上手くいくか…）」

白式の展開可能な装備を調べる一夏。

「一個しかないのか…」

『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されてない。

「やってみるか！」

一夏は近接ブレード《名称未設定》を呼び出し、展開する。キィィィン…。高周波の音とともに、一夏の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。片刃のブレード、渡り一・六メートルはある長大な『刀』が一夏の武器。

「中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうなんて…笑止ですわ！」

「そう言うけどまだ一発も当たってないぜ」

「お黙りなさい！」

すぐさまセシリアの射撃。しかし一夏をすり抜けていくだけだった。

「（くそ！一次移行も終えていないからか、『白式』の反応が鈍い。セシリアとの距離は二十七メートル。一気に距離を詰めたいがそれが出来ない。無理に距離を詰めれば…避けることが出来ず直撃か）」

セシリアも焦っているが一夏も内心焦っていた。

「（でも、距離を詰めればこちらが優位だ。セシリアは自分でも中距離射撃型と。近接格闘の間合いで、あの長大なライフルが役に立つとは思えない。それに見ている限り近接用の装備はない。強引に攻めてみるか）」

一夏は一気に距離を詰めようとした。

「させませんわ！」

セシリアの射撃の勢いが増した。ビットからの射撃も凄いものだ。

「（行ける。後は集中するだけだ。箒との放課後の特訓が生きてきた。集中は、剣術の究極にして基礎だからな）」

段々距離を詰める一夏のスピードが上がってきた。

「(しかし、箒には感謝だな。特訓の事もだけど小さくなった俺の面倒を見てくれて。幼馴染というのもあるかもしれないが…)」

戦闘中に箒の事を考える一夏。

「(初日には箒に抱きついたっけ。いや、抱きしめられた？そして同じ部屋になって…)」

初日からの箒にとのやり取りを思い出す一夏。

「(箒に…もらったり、箒に…したり、箒と一緒に…たり、箒と、箒と、箒と、箒と…)」

段々と一夏の顔が赤面してきた。

「(うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！)」

両手で頭を抱える一夏。顔から湯気が見える？ような気がする。

「(俺って何をしてるんだ！いくら子供の姿で精神も幼児化してい

てもあんな事やこんな事をするなんて！それに何か凄い事を言ったような気もする。やべ。俺、箒の顔を見れない）」

さらに赤くなる一夏。白式が赤く見えてきた。某専用のＭＳのようだ。

「隙ありですわ！」

「あっ…」

羞恥心で頭を抱えていた一夏をビットが取り囲んでいた。いつの間にかビットの数が六機に増えていた。しかもレーザー射撃タイプとは違うようだ。これは『ミサイル』だ。そして…

ドカァァァァァァンッ！

一夏は爆発と光に包まれた。

「一夏っ…！」

モニターを見ていた箒が思わず声を上げた。

「ふん…」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らした。けれどその顔には安堵の色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め（よかった。一夏は無事の様だ。もし一夏に何かあればオルコットの奴、退学だけではすまさんぞ）」

ブラコンで国家問題を起こしかねない千冬だった。と、それは置いといてかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。そしてその中心には、某専用…ではなく純白の白い機体があった。そう、真の姿で…

〝フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください〟

一夏の意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウインドウ。真中には『確認』と書かれたボタンがある。一夏はそのボタンを押した。そうするとさらに膨大なデータが流れて込んできた。いや、正確には整理されいるのだろう。そして変化は劇的に訪れた。

キィィィィィィィィィィン！

高周波な金属音。刹那、一夏の全身を包んでいる…いや、一夏の身そのもののＩＳが光に粒子に弾けて消え、そして形を成す。

「これは…」

新しく形成されたＩＳ装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。そして先ほどより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか…一次移行？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたて言うの」

そういう事だ。『最適化』が終わり、やっと白式は一夏専用になった。機体のデザインも変わったが、何より変わったのはその武器だった。

『近接特化ブレード・《雪片弐型》』

その名前はかつて千冬が振るっていた専用ＩＳ装備の名称。刀に型成した形名。それが雪片。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「は？」

「守られるだけでなく、今度は俺が守らないとな」

「は？あなたは、何を言って…」

「私的な事だよ。でも今回は…」

「何の話を…ああもう、面倒ですわ」

一夏に向かってビットが飛んで行く。

「（見える…）」

一夏は雪片弐片を構えて。

「セシリア・オルコット！」

「？」

「下手に動くなよ。まだ手加減が出来そうにない」

そういと雪片弐型に光の粒子が集まり刀身が光輝いた。そして一夏は縦一閃に振り抜いた。そうすると刃先から超高密度のエネルギーを斬撃として放出されビットを斬り裂いた。

「なっ、何ですの？」

焦るセシリア。

モニターを見ている箒達。

「あ、あれはいったい何ですか？」

「ああ。あれは…」

［ＢＬ○ＡＣＨの月牙○衝ですね。わかります！」

両拳をグッ！と握りモニターを見る真耶。

「「（だから何がわかったのだろう？）」」

二人ともそう思うのだった。

そして一気に距離を詰めるためセシリアに突撃する。機体の瞬間速度、センサー解像度はさっきまでの比じゃないようだ。反応の鈍さなど微塵も感じない。そしてセシリアの懐に飛び込んだ一夏は、もう一度月〇天衝？のようなものを放つため全エネルギーを一気に集中した。

「きゃぁ」

セシリアは目を瞑り身構えた。

「・・・・・・・・・・・・」

が、その斬撃がセシリアに当たる事はなかった。なぜなら…

『試合終了。勝者…セシリア・オルコット』

「えっ…」

セシリアは何故勝ったのかわからず困惑していた。それはアリーナで観戦していたギャラリーもモニターを見ていた筞、真耶も同じだった。

「おめでとう。セシリア」

一夏は笑顔でセシリアを称えた。

「あいつ、わかっててやったな…」

千冬は「やれやれ」という顔をして意味あり気な事を言う。試合結果は…一夏の負け？のようだ。

## だいよんわめ～（後書き）

次回からセシリアにもフラグが成立しますが、いちか君への対応をどのようにするか悩んでます。可愛さに振り回されるのは考えてますが箒とは違う対応を考えてます。ここまで読んでくれてありがとうございます。

## だいごわめ～（前書き）

なんだかプライベートで忙しくなり、更新が遅れがちです。
何とかがんばりますのでこれからもよろしくお願いします。
セシリアファンのみなさん、すいません。何かセシリアの
キャラが変になりました。

**だいごわめ～**

セシリアとの戦闘を終えてピットに帰る一夏。

「お待ちなさい！」

「ん？」

その一夏を呼び止めたセシリア。

「あなた、ワザと負けましたわね！」

激昂するセシリア。無理はないだろう侮蔑した相手に情けをかけられたのだから。

「（ああ…やっぱりバレたか）」

戦闘中にシールドエネルギーも消費していないのに残量が０になるはずがない。

「最後の一太刀、全エネルギーを雪片弐型に集中させて、そのまま

拡散した」

「何をしたなんて、どうでもいいですわ！わたくしが聞きたいのは何故ワザと負けたかですわ！」

「そこですか…」

自分の頬を人差指でポリポリとかく一夏。

「返答によっては…」

セシリアは長大な銃器、《スターライトｍｋ？》を構えた。

「理由は二つ。一つ目はクラス代表なんて俺はやりたくない。二つ目、これが一番の理由かな。小さい俺も同じ考えだ」

「それは、何ですの…」

「セシリアに認めてもらいたかったからかな」

「は？」

「今が女尊男卑社会だからかな。セシリアって男を下に見ているところがあるだろ。それと男を嫌っているようなところもあったかな」

「（男ではなく情けない男ですけど…）」

「俺が男だからって理由で俺の実力を測られたくなかった。それに嫌われたくなかった。だからまずは全力で戦って俺の実力を知ってもらいたかった」

「そして私より強い事を証明して、そしてワザと負けて情けをかけ侮蔑した私を嘲笑しようと？」

「そんな事はしない。さっき言ったろ？セシリアに認めてもらいたかったって」

「何を認めろというのですの」

「ＩＳの技術を競い合い高め合う《ライバル》として、そしてこれからＩＳ学園で同じ時間を過ごす《友達》としてさ…」

「は？」

セシリアは何を言われたのか一瞬理解が出来なかった。

「（え、えっと、何て言いましたの？た、確かライバルと言ったような…ま、まあそれは置いて、と、友達と言われたような…つ、つまり、わ、私と、と、友達なりたいと？）」

動揺するセシリア。

「それにしても、セシリアはやっぱ強いな」

「はへ？（こ、今度は何ですの）」

変な返事をするセシリア。

「先っきの戦いは、セシリアの油断があったからあそこまで戦えたけど、それがなく、最初から本気で戦っていたら俺は負けていたな」

千冬なら油断する時点で駄目だと言いそうだが。

「えっ？」

「イギリスの代表候補生ってのは伊達じゃないな」

「と、当然ですわ」

「やっぱり、代表候補生として背負っているものがあるからか？セシリアと戦っている最中に見つけたぜ。俺が背負うもの…守りたいものをさ。だから俺は強くなるぜ」

そう言って一夏はセシリアを見る。強い意志の宿った瞳で…

「・・・・・・・・・」

セシリアはただそんな一夏に見惚れていた。

「そういえばこの姿で会うのは初めてだな。じゃぁ遅いけど改めて自己紹介するな。俺は織斑一夏。小さい俺、共々よろしくな」

そう言って一夏は笑顔で右手を差し出した。

「…ぁ…い…」

何を言ったか聞こえないくらいの声で返事をして、おずおずと手を出して一夏と握手をするセシリア。

「よ、よろしくですわ…」

もはや、先ほどの激昂したセシリアの姿はなく、しおらしくなっていた。

「ん？」

白式が三人の生命反応を感知した。どうやら箒達のようだ。中々帰って来ないので様子を見に来てくれたのかもしれない。

「っ！」

一夏は小さい自分と箒とのやり取りをまた思い出し、真っ赤になった。

「（だ、ダメだ。今は箒の顔をまともに見えない。心が落ち着くまで一旦引こう）」

一夏がセシリアと手を離すと。

「あ・・・・・」

名残惜しそうに離れた手を見るセシリア。

「じゃぁ、またな！」

そう言うと一夏はＩＳを停止させ、一夏からいちか君になった。

「一夏！」

いちか君になったその時箒達が来た。

「箒お姉ちゃん～」

箒の所に走って行くいちか君。

「あ、ああ。いちかお疲れ様。（もう一夏からいちか君になったの

か。一夏ともっと話をしたかったのに…）」

「いちか君お疲れ様です」

真耶が労いの言葉をかけてくれる。

「よくがんばったな…（ワザと負けた理由を聞こうと思ったのだがな。まあ、大体の理由は想像がつくがな）」

そう思いながらいちか君の頭を撫でる千冬。それにしても千冬はいちか君には甘いようだ。

「えっと、ＩＳは待機状態になってますけど、織斑君が呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

資料を渡す真耶。少しＩＳの事を説明するとＩＳは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤーカフス。いちか君は何故か…ヒマワリを模った名札だった。平仮名で『いちか』と書かれている。裏面には迷子になった時の連絡先まで書かれている。白式の親切設計なのか？というかこれは誰かに盗まれるような気がする。

「今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

「はい…」

何処か呆けているセシリア。

「「（一夏と何かあったな…）」」

女の感でセシリアの様子が変な事に気がつく箒と千冬。

「バイバイ～セシリアお姉ちゃん～」

手を振るいちか君。

「はい！さよならですわ」

急に笑顔で手を振り自分のピットに帰るセシリア。

「「（絶対に何かがあった！）」」

確信する二人だった。

寮への帰り道、いちか君と箒は手を繋いで歩いていた。

「いちか」

「何、箒お姉ちゃん」

「その、なんだ…負けて悔しいか？」

「・・・・・・・」

無言になるいちか君。ワザと負けましたとは言えないようだ。

「う、うん。悔しいよ…」

「そ、そうか…」

箒は一夏がワザと負けたのは気がついてないようだ。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ＩＳの訓練もいれないといけないな」

言葉を続ける箒。どうもよそよそしい。そわそわしているよいうか…

「箒お姉ちゃんはＩＳの操縦を教えてくれるの？」

「む、無理にとは言わないぞ。なんなら、千冬さんに教えてもらったほうがいいのではないか？」

「ん～千冬お姉ちゃんは嫌がると思うよ。えこひいきと思われちゃうし」

多分いちか君が頼めば千冬は迷うことなく了承すると思う。どんなに反対されても…

「そ、それなら先輩にでも教えて…（だ、ダメだ！そんな事をすれば、い、いちかが先輩達の毒牙に！）」

変な妄想をする箒。

「箒お姉ちゃんが嫌だったら…」

「い、嫌とは言ってない！」

びっくりするいちか君。

「そ、その…い、いちかは私に教えて欲しいのだな…」

「うん！」

笑顔で頷くいちか君。

「そ、そうか…そうかそうか。なるほどな。ふふっ、仕方がないな」

急に嬉しそうにする箒。よほど嬉しいのかしきりに髪をいじっている。長いポニーテールの一部を指先で絡めてはほどくを繰り返している。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

「うん。ありがとう箒お姉ちゃん」

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「はい！」

手を上げて返事をするいちか君。

「（放課後もいちかと一緒にいられる。それにＩＳを機動させるから本来の一夏とも話せる。一度に二度楽しめる…ハッ！イカン、私は何を考えて…でも、久しぶりに会った一夏。かっこよくなっていたな…小さいいちかとかっこよくなった一夏。イイ？）」

箒の脳内では箒を真中にいちか君と一夏とで握手をしてお花畑をスキップしていた。どうやら逝っちゃたようだ。あ～涎が出ている。そんな箒を見ていちか君は…

「箒お姉ちゃん怖い。どうしちゃたんだろう…」

箒の逝っちゃっているモード？を理解できず何時もどうり怯えるいちか君だった。

サアアアアア…

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れいく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとしたセシリアの自慢だ。しゅっと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルには引けを取らないどころか勝っているくらいである。シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

「（今日の試合…）」

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

「（ワザと負けた相手なのに…）」

腑に落ちない。なんだかすっきりしない。

「（織斑、一夏…）」

あの男子の事を思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。他者に媚びる事のない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

「（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）」

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていた。幼少の頃からそんな父親を見て『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいられなかった。母は強い人だった。けれど憧れた人だった。でも両親はもういない。三年前事故で他界した。いつも別々で過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのかは未だにわからない。そして手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためあらゆる勉強をした。その一環で受けたＩＳ適正テストでＡ＋が出た。そのままブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、データ収集と戦闘経験値を得るため日本に来た。

そして出会ってしまった。織斑一夏と。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏…」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。どうしようもなくドキドキする。

「・・・・・・」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。なんだろうこの気持ちは。意識

すると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

知りたい…その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏の、ことを。

そしていちか君…

最初は何とも思わなかったが今は…母性本能を擽るというか、あの軟肌に触れてみたいというか。

「（私色に染めてみたいですわね…）」

ジュルリ…という音が聞こえそうな感じがする。頬は緩み目は…逝っているようだ。

「（明日からが楽しみですわね…）」

キラン！とセシリアの目が光った。

ゾク！いちか君は身震いをした。

「どうした、いちか？」

いちか君の様子が変なので心配する箒。

「わからいけど、凄く怖い感じがした…」

「？」

ニュータイプに覚醒しつつある、いちか君だった。

## だいごわめ～（後書き）

次回は鈴音を登場させます。いちか君とどう絡ませるか…
とりあえず逝っちゃうとは思います。
では～

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7769y/

ＩＳ　いちか君と一夏のＩＳ学園生活

2011年12月11日08時48分発行